



## 青色の時間

森谷 明子

### プロフィール

03年、鮎川哲也賞を受賞した王朝ミステリ『千年の黙・異本源氏物語』でデビュー。『れんげ野原のまんなかで』ほか。現在、ジュブナイル二篇、執筆中です。

午前四時半。コウタは窓の外に目をやる。空がうす青くなってきた。今夜もなんとか切り抜けられた。コウタの仕事は保健所の夜間救急受付だ。夜中、具合が悪くなった人からの電話を受けて、診察してもらえぬ病院を紹介するのだ。夜みてくれる病院は少ない。

今夜は急病の子どもが五人もいた。むすこのシンタのことを思うと病院に問い合わせる声にもつい熱が入るし、時間がたつのが早い。長いはずの夜もあっというまだった。

みんな、早くよくなれよ。せっかくの夏休みだものな。そんなことを思いながら、つかのま、コウタはすわったまま眠りに落ちていた。

何かの物音にリョーコは目が覚めた。しぶしぶ目を開けたが、何も変わったことはなさそうだ。だいじょうぶ。まだ眠れる。この淡い青色の光は、目覚まし時計が鳴るまでまだ時間がある。リョーコは目をつぶりながら考える。

どうして時間がたつのはこんなに早いんだろう。ついさつき布団に入ったのに。夫のコウタは夜勤で、帰りは十時

前。でも、むすこのシンタは七時に起こさなくては。夏休みのプール教室がある。野菜ぎらいのシンタのためにニンジン入りのフルーツジュースとバナナヨーグルト。ゆうべ洗濯した水着と、ゴーグルも忘れずに持たせて送りだしたら、洗濯機のスイッチを入れて掃除機をかける。部屋が片づくころ洗濯終わりのブザーが鳴る。帰ってきたコウタが布団に入る前に、音の出る仕事は全部やっておかなくては。

よし、階段は静かにおりられた。しばらく耳をすませる。ママはよく寝ている。

いつもはママに起こされるばかりで、自分から早起きすることなんて、めったにない。それなのに、今日はぽっかり目が覚めてしまったのだ。ずいぶん長い間、ベッドの中で寝返りをうったり、まくらを足元に放り投げて寝る場所を変えてみたりしても、どうしても眠れなかったのだ。

あきらめ半分、やけくそ半分で起き上がると、音の少ない家の中には不思議な色にそめられていた。プールの底から